岩波文庫

7043—7045

問はず語り

玉井幸助校訂

岩波書店

昭和四三年八月一六日　第一刷発行
昭和四五年九月三〇日　第四刷発行

問はず語り

定価★★★

校訂者　玉井幸助

発行者　東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号
岩波雄二郎

印刷者　東京都板橋区板橋四丁目四七番七号
山田博

発行所　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・桂川製本

岩波文庫

7043—7045

問はず語り

玉井幸助校訂

凡例ならびに序

一、本書は、桂宮家旧蔵本として現に宮内庁書陵部に襲蔵せられる「とはすかたり」を、現代の読者に楽しく読めるように、その本文を整理して提供することを目的としたものである。

一、但し、ここにいう整理とは原作者の本文を添削改訂する意味ではない。むしろ、原作の優秀な作品であることを尊重して、あくまでその原形に復旧するの意である。即ち部分的に不可解な個所あるとき、まずこれを後人書写の誤ではないかとして、作品全体の上から検討を加え、その誤写の動かすべからざるを確かめた上で正しい形に還元する意である。一例は写真版に示す。

一、現存書陵部襲蔵本「とはすかたり」は天下の孤本であり、いつ、誰の筆写したものか不明である。袋綴全五冊、表紙題簽に「とはすかたり」とある文字は霊元天皇御宸筆と拝察せられているから、本文の書写も、各巻別筆ではあるが、すべて同時代、およそ元禄少前の頃であろうかと言われている。さらば原稿からは遙かに六百数十年後の写本であり、それまでに幾たびも転写を経たことが推測せられる。本文中に四個所、「ここから紙が切り取られているので、残念だが切口のところから写す」という意味の小書きの注を入れた所があるから、現存本が後世の写本であることはもちろんである。しかも、その切り取りを注した四つの注のうちの一つは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

小書きにしてないので、本文中にまぎれこんで、ふと見れば本文の如く見えるが、つづけて読めば全く意をなさない。これは既に注の付けてあった写本を、注とは気付かず、機械的に写してしまった結果である。これによって現存本は少なくとも三転写本であるが、おそらくは更に多くの転写を重ねたものであろう。従って幾多の誤写や脱落が発見せられる。この「岩波文庫本」は、これらの誤写や脱落に対して厳密な検討を施し、つぶさにこれを校訂した。

一、原本は、全五巻ともつづけ書きであるが、本書では次の如く整備した。

一、まず全五巻を通じて百三十三段に分け、各段に内容を標示する題名を付けた。

一、原文には、句読点、濁点、「　」『　』、改行など一切なく、すべて、べた書きで、ただ和歌を四字、又は三字ほど下げて別行にしてあるが、本書では現行の様式に従って前記各種の記号を用いた。

一、和歌は贈答の場合であっても、すべて三字下げ別行としたが、消息文または対話と結びついて一連の表現をなすものは「　」を加えて本文につづけた。

一、地名・人名・社寺名・根拠ある経文・詩句等、たとえば、さか(嵯峨)、さいをんしさねかぬ(西園寺実兼)、とかのを(狩尾)、せうくてい院(勝倶胝院)、さんかいむあんゆによくわたく(三界無安猶如火宅)、かしんれい月くわんふきよく(嘉辰令月歓不極)の類は、すべて漢字をもって統一し、ルビを付けた。この他にも原文の仮名書きを漢字に改めた所がある。要するに解しやすくするためである。

一、仮名遣はすべて歴史仮名遣をもって統一した。

一、当て字の用いられているもの、例えば、如意輪堂を女意輪堂、如法を女はうと書いてある類は正字に改めた。ただし、皇太子を東宮（とうぐう）とお呼び申し、これに春宮の文字を当てて同じく「とうぐう」と読むことは、今も行われていることであるから、原本にこの両様が混在しているのは、そのままにしておいた。

一、各段の初に、その段の要旨を小書きして解釈上の参考に供した。

一、巻末に、人名索引、諸家系図を添えた。解釈上の参考に資して頂きたい。

昭和二十五年三月十五日、宮内庁書陵部編桂宮本叢書の一冊として「とはすがたり」が公刊せられ、初めてこれを繙読した時の感激は忘れ得ない。爾来約二十年、愛読をつづけ、漸くここに、本書を編するまでに読み解くことを得たのは、山岸徳平氏、松本寧至氏、次田香澄氏、冨倉徳次郎氏、長野甞一氏、呉竹同文会諸氏を初め、多くの熱心な「問はず語り」愛好者の方々の学恩によるものである。記して感謝の意を表する。

本書の出版に関し、多年にわたってお世話になった伊地知鉄男氏、大窪太朗氏、橋本不美男氏、平林盛得氏を初め書陵部職員の方々に厚く感謝の意を表する。

昭和四十三年一月十五日

玉井幸助

目　次

凡例ならびに序……三

巻一

一　十四の春（文永八年）……一七
二　鶴の毛衣……一八
三　つれなき一夜……一九
四　しのぶの山……二三
五　にひまくら……二四
六　のがれぬ契……二六
七　東二条院の御産……二八
八　後嵯峨院御悩……三〇
九　天下諒闇（文永九年）……三一
一〇　大納言の嘆き……三四
一一　大納言発病……三五

一二　風待つ露……三七
一三　最後の教訓……四〇
一四　涙の海……四二
一五　人のなきあと……四四
一六　すさみごと……四六
一七　ゆきちがひ……四八
一八　心のほかの新枕……四八
一九　お好みの白物……五一
二〇　六趣を出づる志……五四
二一　醍醐の山寺……五六
二二　皇子誕生（文永十年二月十日）……五九
二三　白銀の油壺……六一
二四　二つの帯（文永十一年）……六三
二五　女児出産（文永十一年九月二日頃）……六四
二六　花の白浪……六七
二七　嵯峨殿へ御幸……六九
二八　折りやすき花……七二
二九　売炭の翁……七五

三〇　東二条院の不満……七七
三一　越えすぎし関……八〇
三二　年の名残……八一

巻　二

三三　十八の春（建治元年）……八三
三四　御かたわかち……八四
三五　罪科の評定……八五
三六　家々のあがひ……八七
三七　三月十三日……九〇
三八　両院の御鞠……九二
三九　御壺合せ……九四
四〇　見はてぬ夢（建治元年九月）……九四
四一　両院伏見御幸……九八
四二　玉川の里……九九
四三　五百戒の尼衆……一〇一
四四　牛王の誓紙（建治二年か、年末有明の文に、二年間恋に悩むとあり）……一〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

四五　小弓の負けわざ（建治三年）……一〇七
四六　六条院の女楽……一一〇
四七　雲がくれ……一一四
四八　三界無安……一一五
四九　春日の夢想……一一八
五〇　小林の伊予殿……一二一
五一　人の宝の玉（建治三年四月三十日）……一二四
五二　梁園八代の古風……一二五
五三　今様秘事御伝授（建治三年八月頃）……一二七
五四　筒井の御所の化物……一二九
五五　酔ひどこち……一三〇
五六　うきからのころ……一三二

巻三

五七　告白（弘安四年二月）……一三五
五八　白銀の五鈷……一三八
五九　今宵の葦分（弘安四年五月）……一四二
六〇　真言の御談義……一四三

六一　扇の使……一四八
六二　嵯峨殿の祝宴（弘安四年十月）……一五〇
六三　京極殿の御局……一五五
六四　男児出生（弘安四年十一月六日）……一五七
六五　鴛鴦といふ鳥……一五八
六六　煙の末……一六一
六七　永き闇路（弘安五年一月・二月）……一六四
六八　父を知らぬ子（弘安五年八月二十日頃出産）……一六六
六九　道のほだし（弘安六年一月・二月）……一六九
七〇　御所退出（弘安六年三月から年末）……一七〇
七一　千日ごもり（弘安七年）……一七三
七二　打出の人数（弘安八年）……一七五
七三　准后九十の御賀（弘安八年二月三十日）……一七六
七四　今日の春日……一八〇
七五　妙音堂の音楽……一八四
七六　舟中の連歌……一八五
七七　憂き身はいつも……一八八

巻四

七八　鏡の宿（正応二年二月）……一九一
七九　赤坂の遊女……一九二
八〇　八橋・熱田……一九三
八一　清見が関・浮島……一九五
八二　三島の社……一九六
八三　江の島……一九六
八四　鎌倉到着……一九八
八五　小町殿……一九九
八六　惟康親王上洛……二〇一
八七　新将軍下向（正応二年十月）……二〇四
八八　武蔵野の冬（正応二年末）……二〇七
八九　善光寺（正応三年二月）……二〇九
九〇　武蔵野の秋（正応三年八日）……二一〇
九一　涙川……二一二
九二　帰京（正応三年九月）……二一四
九三　和光同塵……二一五

九四 菊の籬……二一七
九五 当麻の曼荼羅……二一八
九六 めぐりあひ（正応四年）……二一九
九七 熱田宮炎上……二二三
九八 外宮参拝……二二五
九九 法楽舎……二二七
一〇〇 内宮参拝……二二八
一〇一 二見の浦……二三〇
一〇二 得選照る月……二三二
一〇三 かへる浪路……二三三
一〇四 熱田の写経……二三四
一〇五 涙ことぢふ暁（正応五年か、或は翌年か）……二三五
一〇六 御心の色……二三六
一〇七 笠置寺……二四〇

巻五

一〇八 須磨・明石・鞆の津（乾元元年九月）……二四三
一〇九 厳島参籠……二四五

一一〇　足摺の観音……二四六
一一一　松山・白峯……二四七
一一二　備後の国和知……二四九
一一三　江田の里……二五一
一一四　広沢の入道……二五二
一一五　東二条院崩御（嘉元二年一月）……二五四
一一六　後深草法皇御悩……二五六
一一七　西園寺邸訪問……二五七
一一八　後深草法皇崩御（嘉元二年七月）……二五八
一一九　空しき煙……二六〇
一二〇　天王寺参籠……二六二
一二一　御四十九日……二六三
一二二　母の形見……二六五
一二三　大集経奉納……二六六
一二四　父の三十三回忌……二六七
一二五　人丸御影供（嘉元三年三月八日）……二六九
一二六　父の形見……二七〇
一二七　御一周忌（嘉元三年七月）……二七一

一二八 亀山院御悩……二七二
一二九 那智の写経（嘉元三年九月）……二七三
一三〇 大菩薩の御志（徳治元年三月）……二七六
一三一 形見の面影……二七八
一三二 御三周忌法要（徳治元年七月）……二八〇
一三三 結び……二八二
解題……二八五
人名索引……三〇三
系図……三三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton